編集後記

日本医史学雑誌第68巻4号をお届けいたします．今号も原著2編を含め，盛りだくさんの内容となっています．また，寄せられる投稿数も回復しており，編集委員としてうれしい限りです．編集委員一同，皆様からの投稿をお待ちしております．

さて，COVID-19流行に関して，本年5月に松山で開催された第123回日本医史学会学術大会は，久しぶりの現地開催，対面形式での大会でした．私個人の体験では，本年の学会は，現地開催（オンラインなし）のものと，現地開催とオンライン併用のものが併存していたように思います．私自身，COVID-19流行当初は，動揺し当惑したものの，Zoomなどを用いたテレワークやオンライン集会が始まってみると，その利点に驚きました．とくに，小規模な研究集会などは全国から気軽に参加できるため，地理的な制約から解放されたと感じました．本学会でも，月例会は完全オンライン形式で開催されています．

ただ，一方で，現地開催にも大きなメリットがあるのも事実で，上の現地開催とオンライン併用の学会も，双方の長所を取り入れた試みなのでしょうが，段取りや進行が複雑になり，運営の面で苦慮しているように見受けられます．

進化生態学の観点からみれば，今後COVID-19は，長期的には，感染力は強く病原性は弱くなっていくものと予想されます．本学会の大会や月例会を始め，さまざまな社会活動において，テレワークやオンライン集会を取り入れた仕組みを新たに構築していく必要があるのではないかと考えております．

来るべき第124回日本医史学会学術大会を始め，さまざまな機会に活発な議論が行われるよう，また，ご論考などを投稿をいただけるよう，編集委員一同，お待ちいたしております．

（逢見　憲一）